

早くも動き出した原発回帰 「二度壊された」福島からの疑問

記者コラム 「多事奏論」 編集委員・中川透

「事件や事故が起きたらまず現場へ。記者の仕事の基本だが、東京電力福島第一原発事故のときだけは勝手が違った。

事故前後の3年あまり、私は福島総局で働いていた。原発で爆発が起き、沿岸部へは近づけない。国の出す避難指示区域が次々と広がる。総局のあった福島市内は電話が通じず取材もままならない。最前線の地にいる身ながら、原発の状況を伝える枝野幸男官房長官(当時)の会見のテレビ中継にかじりつく日々。無力感に包まれ、福島県はこの先どうなるのか、とぼうぜんとしたことを思い出す。あれから13年。日本がこんなに早く、原発の「最大限活用」へ動き出すとは思わなかった。政府は昨年、脱炭素社会へ移行する「GX(グリーン・トランスフォーメーション)」の実現を理由に、方針転換の戦略を決めた。聞こえのよい言葉だが、ふるさとを奪われた福島の人たちには、どう映るだろうか。

「唐突な原発回帰に驚いた。原子力村の既得権益を守る動きで、日本を立て直す足を引っ張るのではないか」。福島県須賀川市の北村俊郎さん(79)は指摘する。原発の運営会社・日本原子力発電の元理事で、自らもムラの一人だった。再生可能エネルギーの技術革新など大きな変化がおきているのに、原子力関係者は過去に引きずられていないか。十分な議論や検証なき転換にそう感じたという。

北村さんと初めて出会ったのは2010年末。運転から40年となる第一原発と地域経済についてのインタビュー取材だった。その3カ月後に事故が起き、原発から7キロの富岡町内の北村さん宅は帰還困難区域に。13年たった今も戻れない。

避難時に携えたパソコンで、事故直後から思いをつづってきた。エネルギー政策のあり方、避難計画の不備、原子力村の体質、被災者間での差別意識まで内容は幅広い。1テーマ1千字ほど、13年で計2千編に達した。記者や原子力関係者ら約300人へ、毎週メールで送った。「福島は二度壊された」と北村さんは言う。多くの人が住まいやなりわいの田畑を奪われた。さらに、避難の仕方の違いや受けとる賠償金の差でわだかまりやすれ違いなど県民の分断も広がった。原発にいかにも利点があっても、住民にこんなつらい思いをさせてはならない。その思いが原子力について考える原点となった。書き続けるうちに、自らが仕事にしてきた原発をより幅広くながめるようになった。推進が今後も正しい道なのか、疑問が膨らんでいったと振り返る。

元日に能登半島地震が起き、災害列島で原発を「最大限活用」する難しさを改めて感じる。北陸電力志賀原発は運転停止中だったが、動いていたら安全を保てたか。海に突きでる半島は避難路が途絶えやすいと浮きぼりになった。運転中の四国電力伊方原発など多くの原発が半島にたつ。事故があったら住民は計画通りに逃げられるか。次々と疑問が浮かぶ。

万一の際に運転をとめ、原子炉を冷やし、放射性物質を閉じこめる。原発の地元の人たち

が何度も聞いた安全策が働かず、福島の間がある。地域を壊される思いの人が二度と現れないように、「安全最優先」とうたう政府や電力会社の対策の実効性を問い続けなくてはならない。今年は約 3 年おきのエネルギー基本計画見直しが始まる。原子力行政への信頼はまだ回復していないと思う。国民の疑問や課題を解消せず、GX を旗印に原発回帰へ突っ走ることには許されない。多様な視点での検討は事故の教訓のはずだ。」(「朝日新聞デジタル」2024 年 3 月 11 日 18 時 00 分)



原発事故直後、避難所となった体育館の床に正座し、住民におわびする東京電力の経営陣ら。その様子取材し、原発が地域に取り返しのつかない被害をもたらすことを痛感した
=2011 年 5 月 4 日、福島県二本松市



北村俊郎さんは書きためたエッセーをもとに著書「原子力村中枢部での体験から 10 年の葛藤で掴（つか）んだ事故原因」（かもがわ出版）をまとめた